子宝船

きたきた捕物帖（二）

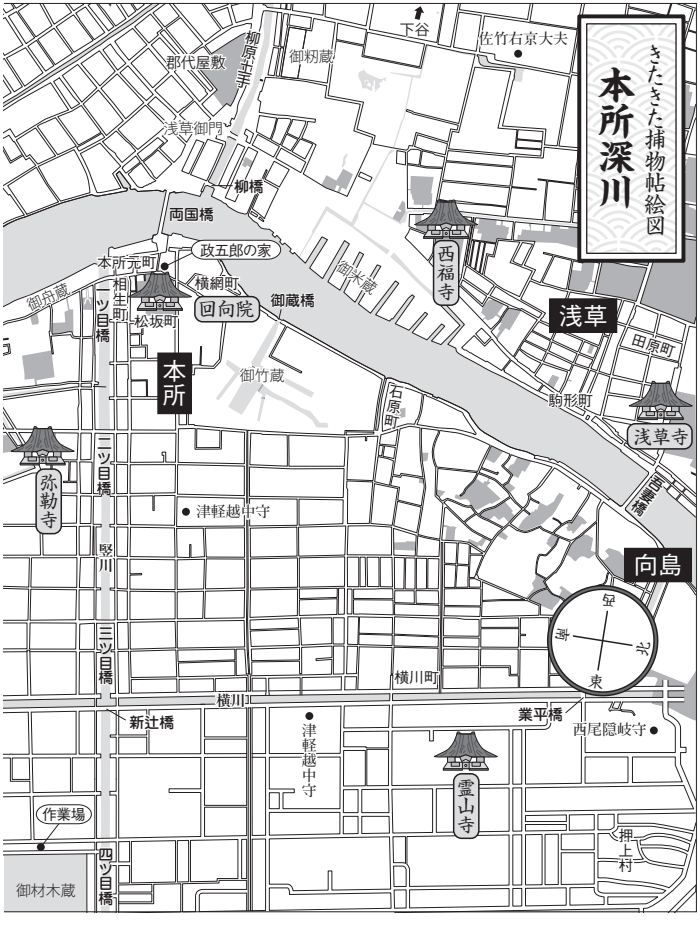
宮部みゆき

PHP
文芸文庫

○本表紙デザイン＋ロゴ＝川上成夫

目次

第一話 子宝船 9
第二話 おでこの中身 169
第三話 人魚の毒 259
《特別対談》本を読む楽しみ——時代小説がおもしろい
宮崎美子vs宮部みゆき 414


きたきた捕物帖絵図
本所深川
下谷
佐竹右京大夫
御籾蔵
柳原土手
郡代屋敷
浅草御門
柳橋
両国橋
政五郎の家
本所元町
横網町
回向院
御蔵橋
御舟蔵
一ツ目橋
相生町
松坂町
本所
御竹蔵
西福寺
御米蔵
浅草
田原町
駒形町
石原町
浅草寺
吾妻橋
弥勒寺
二ツ目橋
津軽越中守
竪川
向島
三ツ目橋
横川町
横川
新辻橋
業平橋
西尾隠岐守
津軽越中守
霊山寺
作業場
押上村
四ツ目橋
御材木蔵
北
西
東
南

佃島
石川島
八丁堀
霊岸島
豊海橋
湊橋
銀座
田安殿
永代橋
御船手組
村田屋
秋元但馬守
中洲
大川（隅田川）
佐賀町
富勘長屋
上ノ橋
清住町
新大橋
永代寺門前仲町
北永代寺門前仲町
海辺大工町
深川元町
御籾蔵
永代寺
相生橋
常盤町
正覚寺
高橋
北森下町
富岡八幡宮
永木町
おかみさんの家
浄心寺
霊巌寺
小名木川
田安殿
深川
洲崎
土屋采女正
木置場
木置場
木置場
松平伊賀守
扇橋町
新高橋
菊川橋
猿江橋
欅屋敷
細川越中守
扇橋
猿江町
猿江稲荷
一橋殿
長命湯
小名木川橋
細川越中守
六万坪
十万坪
五本松
猿江

北一をめぐる人々

北一……亡くなった岡っ引き・千吉親分の本業・文庫売りで生計を立てる。岡っ引きとしては、まだ見習い。

喜多次……長命湯の釜焚き。北一の相棒。

松葉……千吉親分のおかみさん。目が見えない。

勘右衛門……深川一帯の貸家や長屋の差配人。通称〈富勘〉。

沢井蓮太郎……本所深川方同心。

政五郎……本所深川を仕切る大親分。

三太郎……政五郎親分の元配下。町奉行所の文書係。通称〈おでこ〉。

栗山周五郎……検視の手練れ。与力。

末三……北一の仕事を手伝う職人。

［欅屋敷――椿山家別邸］

若……椿山家別邸の主人。北一が作る文庫の絵を描く。

青海新兵衛……椿山家の用人。

瀬戸殿……椿山家の女中頭。

［富勘長屋］

太一……父・寅蔵の魚の棒手振を手伝う。おきんの弟。

お秀……仕立ての内職をしながら、娘のおかよを育てる。

おしか……青物売り・鹿蔵の妻。

辰吉……天道ぼし。口の悪い母おたつと二人暮らし。

子宝船

――きたきた捕物帖(二)

挿画――三木謙次

第一話

子宝船

一

花火の絵柄をつけた〈朱房の文庫〉を売るのは、土用の入りまでだ。

季節の風物を「売り」にしている商い物は、早め早めに仕掛けるのが肝心なのである。五月六日の菖蒲はのろまだけれど、四日の菖蒲は気が利いている。それと同じで、市中の人びとの身体に夏が染みわたり、土用の鰻が恋しくなるころには、夏真っ盛りの大川の川開きの花火なんか、もう色あせて感じられるものなのだ。

そして、売れ残ったものに未練を残してはいけない。値引きして売ったり、来年の夏までとっておこうとするな。朱房の文庫の評判に傷をつける。紙でできている文庫は、どんなに気をつけてしまっておいても湿気や日焼けにやられるから、翌年売り出してみるとこれまた品下って見えて、朱房の文庫の名を辱める。

これは千吉親分の教えである。昔、親分が一の子分の万作に言って聞かせている

のを、北一は傍聞きしていたのだ。そのころの北一は今よりもよっぽど子どもで、まだ文庫の振り売りに出ていなかったが、親分の説くことはすんなり呑み込める気がした。

一方の万作は、いつものように茫洋と神妙にしているだけで、親分の教えをわかっているのかわかっていないのか、傍目には見てとれなかった。

この夏、北一はとうとう独り立ちして、千吉親分の朱房の文庫を引き継いだ。世間から見れば正統な跡継ぎである万作・おたま夫婦の文庫屋と張り合うことになる独立だが、後悔はしていない。

ただ、こうなるきっかけがおたまとの大喧嘩だったので、万作に対しては申し訳ない気持ちが（ちょっぴり）あって、

「万作さんには挨拶しとくべきだよな？　おいらだけじゃ恰好がつかねえから、立ち会い人として一緒についてきてもらえねえですかい」

と、〈富勘〉に頼んでみた。すると、この老練で食えない差配人はくっくと笑った。

「今さら挨拶なんざ、無駄無駄無駄」

三べんも重ねて言うことはなかろう。

「北さんはあちらに喧嘩を売っちまって、もう勝負は始まってるんだよ。万作に憎まれようが、おたまに呪われようが、仕方がないんだ。今はとにかく自分の商いに励みなさいよ」

そっか。おいらも腹をくくらなきゃならねえんだな。胸にたたみ込んで日々を過ごしていたが、どうしても気になって、一度だけ万作・おたまの文庫屋の前を通ってみた（もちろん手ぶらで、商い物は持たずに）。

そうしたら、店先に茶箱を一つ出し、その中に花火や金魚や団扇と蚊遣りなど、いかにも夏らしい風物を絵柄にした朱房の文庫をひとまとめに入れて、二束三文で売っているのを見かけた。

――万作さん、わかってなかった。

喧嘩はいけなかったけど、おいらはやっぱり独り立ちしてよかったんだ。北一はそう思って、いくらか胸が軽くなった。

さて、北一の文庫作りの作業場は、青海新兵衛がいろいろ算段してくれて、〈欅屋敷〉からほど近いところに定まった。猿江御材木蔵の西側の畑の中にある、道具小屋に毛が生えたような小屋である。

ここらは深川の外れだ。お寺さんと武家屋敷が瓦を連ねているところを過ぎれ

ば、あとは田んぼと畑ばっかりで、町家は限られている。

なかなかよい場所が見つからないので、新兵衛も一時は、試作をしているときのまんま、欅屋敷の一間を使い続ければよかろうと言ってくれた。

「若に絵を描いていただくのだし、文庫作りも同じ屋根の下で行った方が、何かと都合がよくはないか」

有り難い申し出だが、その言葉に甘えるわけにはいかなかった。

「ここに腰を据えちまったら、おいらとか末三じいさんとか、うちで働いて小銭を稼ごうっていう近所の百姓の婆さんとか、年がら年中埃だらけで尻っ端折りしてるような輩がどっしり居着いちまうことになるんですよ。若様のお身体に障りませんか」

北一が勝手に欅屋敷と呼んでいるこの屋敷は、小普請組支配組頭・椿山勝元様の別邸だ。新兵衛は用人として仕えており、白髪頭のお女中の瀬戸殿には頭が上がらない。新兵衛が「若」と呼ぶのは椿山様のご子息で、どうやら病弱らしく、療養のために別邸暮らしをしているらしいのだった。

らしい、らしいばかりなのは、この若様に、朱房の文庫の売り物である絵柄を描いていただきながら、北一はまだお目通りしたことがないからである。ただ新兵衛

も瀬戸殿も、若様をそれはそれは大切にしているということは察している。

「新兵衛さん、そんな気軽においらたちをこのお屋敷の暮らしに近づけたら、瀬戸様に成敗されますよ」

北一に言い返されて、新兵衛は素直に、

——それは恐ろしすぎる！

という顔をした。太い指で鼻筋をほりほりと掻く。

「確かに、瀬戸殿にはお怒りをかいそうだ。だが、若がなあ」

苦しゅうないとおっしゃっている、と。

「まあ、そのうち北さんに引き合わせよう」

そんなやりとりがあってほどなく、新兵衛が畑の中の小屋を見つけてきてくれたのだった。

「地主は朱房の文庫を知っておってな。店賃は要らん、季節ごとに新しい文庫をくれればいいと申しておる」

北一は、末三じいさんと連れだって小屋を見に行った。なにしろ畑の真ん中だから、やたら風通しと陽当たりがいい。末三じいさんが、それがいちばん肝心だ、ここにしようと言った。

「お天道様が出ているあいだは仕事ができる。糊がよく乾くし、材料の紙が湿気ない。いいことずくめだよ」

早々に話を決め、小屋の掃除をして道具や材料を運び込んで作業場を作りあげた。すると、北一の心の臓がうっかり口から飛び出そうなほど驚き、その（飛び出した）心の臓は放っておいて地べたにぬかずきたくなるほど有り難く思ったことに、瀬戸殿が祝いの品を持って訪ねてきてくれた。

三方に鯛の尾頭付きと砂糖菓子の包みを載せ、後ろに従える青海新兵衛には朱塗りの角樽を持たせて、瀬戸殿は青菜ときゅうりの畑の畝のあいだをゆうゆうと抜けてきた。

瀬戸殿は、もしかしたらこのあたりの氏神様より歳をとっているかもしれない。ぜんたいに干からびていて縮まっている。なのに声は朗々として、背筋はピンと伸びている。髪には髢をたっぷり入れて御所髷に結いあげ、欅屋敷の内ではいつも江戸褄の裾を御殿風に長く引き摺っているのだが、この訪問の際には重ね草履を履き、着物の裾をたくし上げて、土埃よけに被布をまとっていた。

「あ、あ、あ、有り難き幸せに、存じあ、あ、あげます」

北一は自分でもよくわからない譫言を吹いて、瀬戸殿のしわくちゃで小さな手か

ら三方をうやうやしく頂戴した。そう重くはなかったから安心した。鯛からは旨そうな匂いがした。

「北一殿、本日はめでたいの」

瀬戸様のお言葉に、北一はせっかく拾い上げて呑み込んだ心の臓がまた飛び出してしまった。うそ？　ホント？　今まではおいらのこと、「下郎」「そこの者」「これ、文庫屋」としか呼んでくれなかったのに。

「若がそなたにたいそう肩入れしておられ、この瀬戸にも、どうか祝ってやってくれと仰せになりましたのでな。こうしてまかりこしましたぞ。これからは日々、そなたの本分を尽くして励みなさい」

北一にはちょっと難しかったけど、たぶん、いい言葉だったのだろう。

あとで新兵衛に、「北さんのあの顔は、この先十年くらいは忘れられんなあ」と冷やかされ、「角樽を提げて畑の真ん中に突っ立ってた新兵衛さんもなかなかのものでしたよ」と、やり返した。そして一緒に笑った。

末三じいさんも、顔じゅうの皺をのびのびとさせて笑っていた。その後、じいさんの娘夫婦がお花見みたいに重箱を持って来てくれて、それを囲んで祝いの宴をした。

千吉親分を亡くして以来、こんなに心が温かく、軽くなったのは初めてだ。北一は、自分でも気づかぬうちに何度も目を拭っていた。笑いながら泣いていたのだ。

これでよかった。親分もきっと喜んでくださる――いや、喜んでもらえるように、これから毎日を積み上げていくんだ。

北一が住んでいる深川北永堀町の「富勘長屋」と、猿江御材木蔵のそばの文庫の作業場と、この二ヵ所を糸で結んでまん真ん中でちょっと弛ませると、そこが横川の扇橋のあたりになる。

その扇橋にある「長命湯」。立ってるだけで左右どっちかに身体が傾いじゃうくらい年寄りの爺さん婆さんが切り回す、見る方向によって建物も屋根も庇も左右どっちかに傾いているように見える、年季が入った湯屋だ。

ここの釜焚きが、北一が「きたさん」と呼びかける喜多次である。

湯屋の釜焚きは、焚き付けに様々なものを拾い集めるので、けっこうな汚れ仕事だ。喜多次も、いつ会っても垢か煤か埃か土埃かその全部が合わさったものかにまみれている。ぼうぼうのおどろ髪を、荒縄で一つにくくっている。御伽草子に出てくる山姥だって、もうちょっと髪を梳いていそうな気がする。喜多次のうなじの髪

の束のなかで小鳥が卵を産んで孵しても、北一はあんまり驚かないような気もする。

しかし、こいつは、ホントは人形みたいにきれいな顔をしているのだ。おまけに信じられないほど腕っ節が強いのだ。音も立てずに素早く動き回れるところは、いたちや蛇の化身さながらなのだ。

そんな喜多次と知り合いになり、助けたり助けられたりする間柄になっていることを、北一は誰にもしゃべっていない。文庫売りのことでは何から何まで世話になっている青海新兵衛にも、困ったときの富勘にも、千吉親分の寡婦で、今の北一の後ろ盾である冬木町のおかみさんにも。理由は、誰にも言わないでくれと頼まれたからだ。

喜多次は謎だらけの男である。いや、若者である。子ども――ではない。どうにも歳がわかりにくい。十六歳の北一よりいくつか上のように見えるときもあれば、年下に感じられるときもある。

昨年の暮れ、水溜まりに薄氷が張るような寒さの朝、喜多次は浴衣一枚の姿で長命湯の裏庭に倒れているところを助けられた。そのまま居候になり、釜焚きになった。喜多次がこんなに腕っ節が強いなんて、長命湯の爺さん婆さんたちも、場

末の古い湯屋に出入りする胡乱な客たちも、たぶん、全然気がついていない。北一だけが、喜多次は頼もしい用心棒なのだと知っている。

喜多次の右肩には、烏天狗みたいな風変わりな彫りものがある。この彫りものが二人の縁の始まりだったのだが、その絵柄の意味するところもまだ謎だ。

北一が、自分の生業にこれほど懸命になっていなかったなら、もっと余裕のある大人であったなら、喜多次を怪しむか嫌うか恐れるかしただろう。あるいは詮索しただろう。でも、幸いなことに今の北一にはそのゆとりがなく、謎は謎のまんまで気にならない。すぐに解かなきゃならないとは思わない。

まったく成り行き、偶然の巡り合わせだったのだが、北一は、行き倒れて長いこと土に埋もれていた喜多次の父親の骨を拾ってやったことがある。喜多次はそれを恩に着て、今のところ二度まで北一を助けてくれた。

今後も、何か困ったことがあったら頼っていいのか、北一にはわからない。喜多次が感じてくれている恩は、どのくらいの嵩なのか。二度助けてもらったことで、そのうちのどれくらいを使ってしまったのか。

まあ、いいや。

――悪い奴じゃないからさ。もうちっと付き合ったら、いい奴だって言えるかも

しれないからさ。

というわけで、住まいが深川の西、作業場が深川の東、生業は振り売りの北一は、ふと気が向くと長命湯に足を向ける。喜多次は釜焚き口にいるときもあるし、荷車を引いて焚き付け拾いに出かけているときもあるし、持ち帰った焚き付けをさばいているときもある。

喜多次は石地蔵のように口が重いので、一緒にいたって北一がしゃべっているだけのことが多い。それでよかった。独り立ちしたばっかりの身には、嬉しいこともあれば不安も多い。一日の売り上げが多ければ舞い上がり、どうかしてお茶を挽いてしまった日には泥鰌みたいに泥水に潜りたくなる。おかみさんに褒められれば誇らしいし、心のどこかではいつも万作・おたま夫婦への痼りが疼いている。

そうした喜怒哀楽を、北一がいちいち吐き出しても、喜多次は知らん顔をしている。説教もしないし、慰めてもくれない。「うるせえ」とも言わない。それが心地いい。

たまに、北一が立ち寄っているのに気づいた長命湯の婆さん女中が、ふかし芋とか饅頭とか、おやつを恵んでくれるのも有り難い。

ところが——

土用の丑の日を過ぎ、立秋までの日にちを指で数えられるようになった。作業場では、秋の朱房の文庫〈二十六夜待ち〉の絵柄の新作が次々と作られているところだ。これを立秋の日の朝から売り出すか、立秋の前日から売り出すか。新兵衛は、引札（ちらし）を作って明日からでも配るといい、そうして二十六夜待ちがほしい客を募るのだ、という案を出してくれた。

「引札ですか？　いやぁ……そこまで大げさなことをやるのはなあ」

「何が大げさなものか。この文庫の絵柄は、阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩の三尊のお姿なのだぞ」

七月二十六日の夜の月は三つに分かれて輝き、その一つ一つに三尊のお姿が浮かぶという。これを尊んで月待ちするのが二十六夜待ちなのだ。

「ちょっと考えさせてください」

そう言って新兵衛と別れ、北一は長命湯へ向かった。何となく――ではなく、ちゃんと思うところがあった。

北一のその日暮らしのなかでは、市中にどんな品物の引札が出回っているのか、つぶさに知る機会がない。だが、喜多次が日々集める焚き付けのなかには、毎度さまざまな引札がまじっているのだ。

長命湯に着くと、喜多次は釜焚き口の外に荷車を止めていた。荷台には焚き付けにする紙くず、ぼろきれ、枯れ枝、枯れ草、板っきれや棒っきれなどがうずたかく積み上げてある。

戻ったばかりなのだろう、本人は手ぬぐいで身体の汗を拭いている。その手ぬぐいも、朝は白かったのかもしれないが、今は喜多次の汚れた顔とおっつかっつの色合いだ。

「よお」

声をかけて、北一は荷車に歩み寄った。

「これから焚き付けを仕分けるんだろ。おいら、手伝うよ。そのかわり、この山のなかから引札を探してもいいかい？」

喜多次はちろっと横目でこっちを見た。顔が薄汚れているので、白目がバカに白い。で、いつものように何も言わない。「駄目」ではないし、「何で引札が要るんだ」という問いもないのだ。

北一はせっせと仕分けに取りかかった。

無料でもらえたり、そこらに捨ててある紙くずは、引札や書き物なんぞのきれいなものより、汚れ物の方が圧倒的に多い。いちばん目立つのが厠の落とし紙だ。臭

い。喜多次は偉いなあと思わずにはいられない。

菓子屋と髪結床の引札が見つかった。呉服屋のも、古着屋のも、土用の内の夏布団の手入れを勧める布団屋のも。

しかし、それらをみんな合わせたよりも、数多く見つかった紙くずがあった。引札ではない。そして、本来は紙くずなんて言ってはいけないもので、まるっきり季節外れだ。

宝船の絵である。

正月二日の夜、枕の下にこれを敷いて寝ると吉夢を見られるという。

宝船の絵を売るのは「宝船売り」だ。布袋様や大黒様に扮装し、「お宝～、お宝～」などと声を上げながら、市中を売り歩く。普段は他のものを売っている振り売りが、元日と二日だけこれを売ることが多く、宝船の絵もちゃんとした玄人の手になるものから、子どもだましのものまでいろいろだ。

今、北一がごみの山から掘り出している宝船の絵は、全て出所が同じのようだ。墨一色で、太い筆でざくりと描いてある、七福神を乗せた宝船。筆致が似ているし、紙も一緒だ。

そして、見落としようのない変わった特徴が一つあった。この宝船の絵のなかで

は、七福神のなかの弁財天が一人だけ、見る者に背中を向けているのだ。

「……変わってるよな」

数えてみると、この宝船の絵は八枚あった。破られてはいないが、みんなくしゃくしゃに丸められている。

北一の呟きが聞こえたのか、喜多次がこっちへ目をやった。で、こいつも驚いたのだろう。枯れ枝の葉を払う手を止めて、近づいてきた。

北一は言った。「この船じゃ、弁財天様がお怒りなのかな」

喜多次は宝船の絵を一枚手に取った。

「これ、どっか一ヵ所でまとめて拾ったのかい？　それともばらばらか」

問いかけても答えない。もう一枚、別の絵を手にして二枚を見比べてから、飽きたみたいにふいっと両方とも放した。

「覚えてねえ」

だろうなあ。いちいち気にしてねえよな。

「面白いからもらってっていいか？」

好きにしな――という意味だろう。喜多次は顎をしゃくるようにしてうなずいた。そしてすぐ仕分けに戻っていった。

北一も、深い考えがあったわけではない。このヘンな宝船の絵が、まさか事件につながっていくなんて、夢にも思いはしなかった。

二

千吉親分は、松葉という風雅な名前のおかみさんを世間の風から大事に守って暮らすために、おかみさんに付ける女中にもよく気を配っていた。

今、冬木町の貸家でおかみさんと一緒に暮らし、日々立ち働いている女中のおみつは、北一が知っている限りでは四代目だ。親分に気に入られていたし、おかみさんにも好かれて頼りにされている。はっきり訊いたことがないから、北一は歳を知らないが、姉さんであることは間違いない。きれい好きでお菜づくりと飯炊きが上手いし、明るい気性でよく笑う。目の見えないおかみさんにとって、おみつはよく働く一対の眼だ。

なのに、冬木町に移ってからの暮らしがすっかり落ち着くと、おかみさんはときどき思い出したようにこう呟くようになった。

「おみつにいい縁談はないもんかねえ」

北一が一緒に夕飯をいただいている場でも、
「北さんが住んでる長屋に、おみつによさそうな男はいないかえ」
なんて言うのだから、本気なのだろう。
当のおみつは、そのたびにけろけろと笑っている。
「いい男ができたら、真っ先におかみさんに打ち明けますから、それまではおそばに置いてください」
本気で言っているのか、そういうふりをしているのか。どっちだとしても、
――あたしがいなくなったら、おかみさんだってお困りになるでしょうに。
なんて切り返さないのは、感じがいい。こういう逆ねじは、誰がどんなふうに口にしても気持ちのいいものじゃないからだ。
あいにくと、北一の住む富勘長屋に、おみつの亭主によさそうな男はいないのだが、
「おまえもいいかげんで嫁に行かねえと、古漬けになっちまうど」
「姉ちゃん、身の丈に合った相手を探した方がいいって。いつまでも夢みてえなこと言ってないでさ」
「うるさいわね、あたしが嫁に行っちまったら困るくせに！」

と、大声で言い合いをする家族ならばいる。棒手振の魚屋の寅蔵と、娘のおきんと息子の太一の一家三人である。

ぜんたいに気のいい人たちで、一人住まいでその日暮らしの北一は、親切にしてもらうことも多い。だがしかし、この言い合いだけはやかましい上に、たいていおきんが泣き出して締めになるので、聞かされる方はけっこう辛いのだ。

太一の言っていることから推すと、おきんは身分違いの男に恋をして、辛い想いをしたことがあるのかもしれない。まあ、それを詮索して確かめたところで今さら北一には慰めようがないし、おきんには、

――北さんって、どうしてそんなに髪が薄いのかしらね。おとっつぁんもおっかさんも薄かったの？

なんてことをずけずけ言うところがあるので、正直、うんと心を傾けて同情する気分にはなれないから、放っとくんだけどさ。

おみつの家族も、ことおみつの縁談についてはこんなふうに煩いのか。おみつにも、誰かに岡惚れしたり、磯のアワビの片思いで泣いたことでもあるのか。北一には知る由もなかったし、進んで知ろうとも思わなかった。だって、おっかないよ。

それがひょっこりそんな話になったのは、二十六夜待ちの文庫の引札のことで考

えあぐねて、おかみさんの意見を拝聴しようと、昼間っから冬木町を訪ねたときだった。

「あら、北さん。早いわね」

毎日のようにこの家で夕飯をご馳走になっている北一だから、おみつに冷やかされても仕方がない。

「悪いなあ、腹っぺらしで」

「ちょっと待っててくれたら、お水ぐらいは出してあげる」

にっこりするおみつは、縁側で針仕事をしているところだった。針と針山と絎台と、鋏と晒と色あせた細波模様の布の山。どうやら、古い浴衣をほどいたもののようだ。

「おかみさんは？」

「うた丁さんのところへいらしてる」

深川元町の髪結床である。店主の宇多次の名前と丁髷からとって〈うた丁〉といい、それが店主の通り名にもなっている。北一もよく知っているし、お世話になっている髪結床だけど、

「へ？　どうして」

おかみさんは、自分では手入れができないからと、普段は髷を結っていない。髪はゆるく束ねているだけだ。うた丁も、女髪は結わない髪結床であるはずだ。

「うた丁さんがね、出床でご近所に来たからって、挨拶に寄ってくれたのよ」

――千吉親分にはたいそうお世話になっておりました。もっと早くおかみさんにご挨拶に伺いたかったんですけれど、あたしはこんなむさくるしい野郎でございますし。

うた丁は熊のような大男である。

「遠慮がかさんで足が遠くなりましたって、ずいぶんとしおらしくなすっててね。それで、おかみさんと思い出話とかいろいろ語らっているうちに」

――おかみさん、髪が夏の汗で傷んでいますねえ。うちへおいでくださいな。ちょうど極上の椿油が手に入ったところなんですよ。

うた丁は駕籠を呼んで、おかみさんの手を取って乗っけて、

――手入れが済んだらあたしが送り届けますからね。留守番を頼んだよ。

自分はいそいそと駕籠に付き添って、深川元町へ帰っていったそうである。

岡っ引きと髪結床は縁が深く、千吉親分もうた丁とは親しく付き合っていた。いい岡っ引きにとって、髪結床はいい間者なのだ。でも、そういうおおっぴらにしに

くい面のある付き合いだったからこそ、うた丁はおかみさんへの遠慮があって、今まで挨拶を控えていたのだろう。

「これからは、うた丁の方から御用聞きに来てくれそうだね」

「ホントねえ」

おかみさんとおみつの二人暮らし。よろずのお使いやちょっとした力仕事は、この貸家の大家でもある材木問屋の「福富屋」が人手を貸してくれるし、及ばずながら、毎日顔を出す北一も手伝うことができる。食べ物など日々の暮らしに要るものは、もっぱら御用聞き頼みで困ることはない。これに髪結いまで加わるか。

「北さんはうた丁さんと付き合いがあるんでしょ？」

薄毛に効く〈髪の素〉をもらっているとは、あんまり言いたくない。

「う、うん」

「おかみさんに急ぎの用なら、お店へ行ってみたらいいよ」

そこまで息せき切るほどの用じゃない。というか、おかみさんの髪を洗って梳きながら、しみじみと「千ちゃん」の思い出に浸っているであろう、うた丁を邪魔したくない。

「いや、それこそ夕餉のときで間に合うんだ。最初からそうすりゃよかった。おい

ら、ちっと気が急いちまって」

今朝もちゃんと髪の素をなすりつけた大事な頭を、ほりほり掻いて、北一は笑った。

「これ、何を縫うんだい？」

ほどいた浴衣らしきものをさして尋ねると、

「おしめよ」と、おみつは答えた。「お夕がいつ産気づくかわからなくなってきたから、今のうちに作っといてあげようと思って」

「お夕さんって？」

おみつはあらという顔をした。

「北さんには言ったことなかったっけ。あたしの幼なじみなんだ」

歳はお夕の方が三つ下だそうで、

「あの子のおっかさんがうちで働いてたから、あたしは小さいとき、お夕を背中におんぶして遊んでたこともあるくらいよ。姉妹みたいに育ったの」

おっと、おみつには「みたい」ではない本当の姉がいるはずだ。その姉さんが婿をとり、両親を助けて家業の一膳飯屋で働き始めると、なぜかおみつは厄介者扱いされるようになり、それが嫌で実家を飛び出しちまった――という話を聞いた覚え

がある。

おみつは、北一の小さな当惑には気づかぬふうだ。縫い掛けの布をちょっと引っ張って、縫い目が真っ直ぐになっているかどうか確かめている。

「お夕はね、去年の秋、一色町の緑橋のたもとにある煮物屋さんにお嫁に行ったの」

一色町は佐賀町や富久町などと同じ、永代橋の東側の一帯にある。掘割が縦横に細かく町筋を区切っており、大川の河口に近いから、満潮のときには磯の香が濃く匂うところだ。

「ご亭主も優しくっていい人でね。幸せに暮らしてて、これから初めての赤ん坊が生まれようってところなのよ」

「そいつはめでたいね」

山ほどおしめを積み上げて、生まれ落ちる赤ん坊を受け止めてやろう。

「この浴衣、あたしがずっと寝間着にしてて、いいかげん色が抜けちまってるんだけど、おかみさんが、おしめにはこれくらいくたびれた布の方がいいっておっしゃるから」

おみつの目がきらきらしている。心から喜んでいるのだろう。見ているこちらの

胸にも温かいものがわいてくるようだ。
おみつにはいつも旨い飯を食わせてもらって、細かい用事でも世話になりっぱなしだ。いい折だから、おみつへの礼のつもりで、おいらもお夕さんに何かお祝いをしようか——と、北一は思った。
今のおいらに出せるもの。それは文庫だ。
「おいら、麻の葉模様の文庫を作るよ。あれって、赤ん坊の魔除けになる模様なんだよな。お祝いに、お夕さんにあげてくれねえか」
おみつはきょとんと目を見張った。
「北さんがお祝いをくれるの？」
「うん。だって、おみつさんの妹みたいな人のお産なんだからさ」
わあ、嬉しい。おみつの丸顔いっぱいに笑みが広がっていく。
「ありがとう。北さんって優しくって気が利いてて、いい男——」
そこで、ハッとなった。
「それ、商いになるんじゃないの？」
赤子が生まれたお祝いに、麻の葉模様の朱房の文庫はいかがでござ〜い。
「青海様と末三さんに相談してみたらいいよ。ね？」

わかった、ともかくお祝いの品は作るから。そう言っておみつと別れ、富勘長屋へ戻る道々考えてみると、これはなかなか、確かに商いになりそうだ。お産のお祝いの品として売り出す場合は、空っぽじゃなく、中身が入ってる方がよくねえかな。何がいい？　きれいな産着。お食い初めに使う塗りの箸とお椀とか。犬張り子もいいかな。がらがらは？

頭をひねりながら長屋の木戸をくぐったところで、いきなり誰かにぶつかった。

「あ痛！　何だよ」

目の前にぬうっと突っ立っているのは、物干し竿みたいな長身で、炭団眉毛でどんぐり眼、背中には大きな風呂敷包みを背負った男。

佐賀町の貸本屋、村田屋治兵衛だった。

「忙しそうで何よりですね、北一さん」

どんぐり眼にいささかの険を光らせて、治兵衛は言った。

「もう先、相談があるから、手が空いてるときうちに寄ってもらいたいとお伝えしておいたはずなんですが、まるっきりお忘れのようだ」

そんな話があったっけ。

「えっと……あいすみません、ここんとこ忙しなくって……」

「今は大丈夫ですか。大丈夫じゃありませんか。私もね、こう見えてけっして暇じゃあないんですけども」

治兵衛は、はあっとわざとらしく溜息を吐いて、

「なにしろ商売繁盛の北一さんを捕まえるには、待ってちゃ駄目だと思い知りましたのでね。今日はこうして御輿を上げてきたってわけですよ。ああ、私ども貸本屋は御輿みたいな本箱を担いで歩くのが商いですから、重そうだとか、わざわざ申し訳ないとか気に病むことはありませんよ。私どもはこれが商売で、慣れっこでございますからね！」

「……うちで話しませんか。何にもねえけど、本箱はおろせるから」

「そういうことは早く言うもんです」

貧乏剝き出しの四畳半住まいの北一だけど、掃除だけはまめにしている。それを見てとったのか、上がり框に本箱をおろして、手ぬぐいで顔の汗を押さえつつ、治兵衛は言った。

「北一さんは掃除が好きなんですね。文庫のような綺麗な品物を商うには、とてもいいことですよ」

いやいや、北一、けっして掃除好きじゃないよ。ただ千吉親分の言葉が身にしみ

ているだけだ。

——掃除のできねえ奴は、他のどんな立派なことができたって、ろくな者(もん)じゃねえ。

「あなたの前にここに住まっていた人とも、よく商いの話をしたものです」

どんぐり眼で四畳半を見回しながら、治兵衛は言った。

「歳はあなたより上、なのに世間知らずもあなたより上だったなあ」

先の住人のことなら、富勘から聞いたことがある。若い浪人で、字が上手(じょうず)で、剣術(やっとう)はからっきしで、だから闇討(やみう)ちに遭(あ)って死んでしまったって。

「お武家様だったからでしょう」

「北一さん、さっき歩きながらぶつぶつ呟いていましたね。絵柄がどうとか、中身がどうとか」

いきなり話の向きを変えて、治兵衛が北一の顔を見た。

「新しい朱房の文庫の案ですか？」

「えっと、はい、まあそんなところです」

「今までになかった意匠(いしょう)をつけて、その意匠にふさわしいものを中に容(い)れて売り物にする」

え、何でわかるの？

「私が北一さんと相談したかったのも、そういう売り物を作りたいからなんです」

治兵衛は言って、本箱を包んでいる風呂敷をほどき始めた。

「少しばかり見本を持参してきました。たとえばこれ、『南総里見八犬伝』ね」

唐草模様の表紙のついた綴りを何冊か取り出して、

「『東海道中膝栗毛』でもよござんす」

その綴りは空色に富士山の絵が描いてある。

「こういう読み物の綴りをまとめて一つの文庫に納めて、題簽を貼って絵をつけて」

売り出すんですよ――と言う。

「お化け草紙や御伽草子、句集や歌集などでもよろしいでしょう」

文庫はそもそも本の容れ物である。しかし、治兵衛のこの案のように、最初から本屋の選んだ本を容れて売り出すなんてことは、今まで誰もやったことがない。

「それだと、振り売りには向きませんね」

重たいし、空の文庫をほしがるお客には用がない売り物になってしまう。

「いいじゃないですか。北一さんも、この先ずっと振り売りだけやってるつもりじ

やないんでしょう」

店を持つということか。

「すぐには無理だから」

「おや、おたまさんには威勢のいい啖呵を切ったのに、弱気ですねえ」

え、そんなことまで知ってるの？

「千吉親分は根っからの商人じゃなかったし、気軽に商いの話なんか持ちかけられなかった。あとを継いだ万作さんは真面目だが、私はどうも反りが合わない。おたまさんのえらの張った顔も好きじゃないし、それにあの人は欲張りでいけない」

だから北一に話を持ってきたのだと、村田屋治兵衛は力強く言う。北一を見込んでいるのだと。

「あなたが独り立ちしてから作ってる文庫は、まだ数も種類も少ないけれど品がいいし、絵柄も美しい。万作さんのところとはまったく関わりのない絵師と職人を見つけたんでしょう？　大したものです」

お褒めの言葉は有り難いけれど、この話に乗っていいのか、北一だけでは決めかねる。

「仲間と相談してみないといけません。おいらの考えてる案もありますし、いっぺ

んに手を広げられるかなあ」
北一は首を縮めてみせた。治兵衛も小首をかしげて、
「さっき、ぶつぶつ言ってた案ですか。産着とか何とか聞こえたと思ったんですが、私の空耳ですかね」
治兵衛の耳がいいのか、北一の独り言の声が大きすぎるのか。
「おいら、赤ん坊が生まれたお祝いの品にできる文庫を考えてて」
すると、治兵衛のどんぐり眼がさらにぐいっと大きくなった。そんなに驚くことか？
「絵柄は麻の葉模様に――」
北一の言葉をぶっきらぼうに遮って、治兵衛は言った。「おやめなさい」
眉間に皺をきざみ、口元をへの字に曲げて、
「ほかのお祝い事なら何でもよござんすが、赤子にからむものはおよしなさい」
え、何で？
「赤子はまだこの世の者じゃなく、あっさりあの世に行ってしまうことがあるものだからですよ」
悲しいかな、赤子はしばしば儚く死ぬ。原因がわからず、ただふっつりと命が消

えてしまうことも珍しくない。

「これは神様のなさることだ。人にはどうしようもないんだから、そこに商いをかませちゃいけない」

治兵衛の言うことの意味が、北一にもわからなくはない。どこかで誰か一人でも、麻の葉模様の朱房の文庫を寝床のそばに置いた赤子が死んでしまったら、「あの文庫は験が悪い」と噂されてしまうかもしれない。人の心とはそういうものだ。それを避けるには、最初からそっちには手を出さないのが得策だと言っているのだろうが、

――それじゃへっぴり腰すぎだよ。

そこまで用心していたら、新しい商いなんかできない。

だけど、ただの忠告にしては、治兵衛の顔が険しすぎるような気もする。

「ひょっとして、村田屋さんのお近くで、ホントにそんなようなことがあったんですか」

あてずっぽうに言ってみたら、治兵衛のどんぐり眼が、今度はしゅっと細くなった。

「……鋭い」

え、当たり？

「まさに今の今、うちのお得意さんのところで揉め事が起きているんです」

バチ当たりでふざけていて、でも笑い話にはできなくて薄気味悪い、いざこざ。

「酒屋がお年賀に配った宝船の絵のせいで、生まれたばっかりの赤子が死んでしまったってね」

三

不幸があったお得意さんとは、清住町にある煙草と線香の店「多香屋」だという。ここの先々代が読み物好きの人だったおかげで、村田屋は永年ごひいきに与ってきたのだとか。

「これまでずっと、慶弔どちらのお付き合いもありましたが、これほどの悲しみ事は初めてですよ」

しょっぱい顔をして、治兵衛は言った。

大川端にある清住町は、本来こういう乾き物の商いには向いていないような気がする――と北一は思ったのだが、それを言うなら佐賀町にある貸本屋の村田屋だっ